

## エッセイ 楽しい“虫音楽”の世界 (その15 「四季」の曲—日本編)

## 昆虫芸術研究家

柏田 雄三 (かしわだ ゆうぞう)

ある人から季節ごとにどのような昆虫の曲があるのかとの難しい注文を受けた。「四季」「十二月」をキーワードにして聴くことにする。「四季」と言うとヴィヴァルディの《四季》や芹洋子の《四季の歌》を思い浮かべるが、「四季」を冠した曲は多い。今回はそのうちの日本編である。

八橋検校 (1614～85) の箏組歌《四季の曲》は《扇の曲》《雲井の曲》とあわせて八橋の三曲と言われる。「源氏物語」の初音の巻の描写を経て、春夏秋冬と続く。春は鶯、秋は鹿、松虫と雁が鳴き声を寄せる。

江戸時代からの《四季の遊》《四季の曲》等の箏曲では鳴く虫がよく歌われる。京都の舞妓が踊る《京の四季》は文久年間 (1861～1864) ころに流行した曲で、春は夜桜、夏は夕涼み、秋は紅葉、冬は雪見酒等祇園を中心に東山、圓山の風物を風雅に歌う。伝統音楽を人々に愛唱して貰うため昭和初めに作られた大和楽《四季の花》では、秋の尾花と菊のなかの待虫 (松虫)、鈴虫だ。

瀧廉太郎 (1879～1903) の《四季》は4曲からなる組歌で、第一曲が有名な「春のうららの」の〈花〉。夏の〈納涼〉秋の〈月〉冬の〈雪〉と続く。〈月〉は後に山田耕筰がピアノ伴奏版〈秋の月〉に編曲した。〈月〉だけが作詞も瀧廉太郎で、「などか人に物思はするあゝ啼く虫も おなじ心か」と歌われている。瀧には《四季の瀧》という佳曲もあるがそこでは山桜と紅葉の植物だけだ。

《田舎の四季》は農家の原風景を歌った文部省唱歌で、春の「眠る蝶々と飛び立つひばり」、夏の「桑摘むおとめと太る春蚕」、冬の「餅を引くねずみ」が微笑ましい。

文部省唱歌《四季の雨》は季節ごとの雨の姿を表した佳曲だが歌詞には植物しかない。それをもとにした池田彌三郎作詞、山田抄太郎作曲の《雨の四季》は江戸の下町風景の曲である。

高田三郎 (1913～2000) の合唱曲《心の四季》の第2曲が〈みずすまし〉で、ミズスマシと比べて人間の生き方を歌う。俳句でミズスマシはアメンボを指すことが多いが、この曲の「一滴の水銀のようである」「時々水にもぐる」という歌詞からは甲虫目のミズスマシだろう。

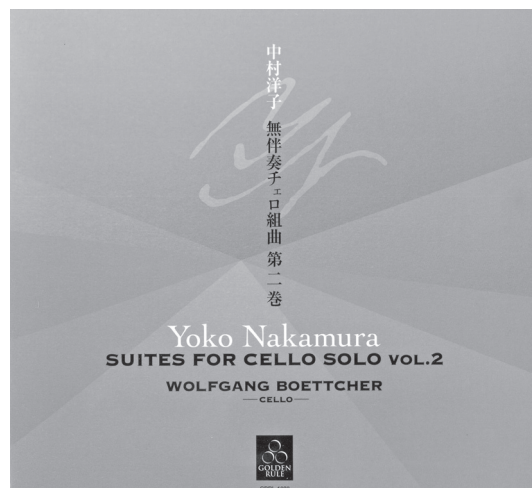
中田喜直 (1923～2000) の歌曲《四季の歌》は作詞

畑中良輔で春には小鳥、秋には鴉が歌われる。三木稔 (1930～2011) の和楽器による《四季 ダンス・コンセルタント I》や武満徹 (1930～96) の打楽器曲《四季》には生き物の姿がなさそうだ。

中村洋子の《無伴奏チェロ組曲》は春、冬、秋、春分、夏、喜びを表す六つの楽曲からなる密度の濃い曲である。人類の至宝バッハの《無伴奏チェロ組曲》に半歩でも近づきたいとの思いで作曲され、季節ごとに六つの楽章からなる。それぞれ季語、俳句等が付され、夏に相当する第5番の2楽章〈灯蛾〉は、ほのかな光に集まる蛾の姿である。

J-POPで昆虫が関係する「四季」の曲名と歌手名を記す。《四季》(大貫妙子)は蟬時雨、《学生街の四季》(岩崎宏美)と《ふるさとの四季をうたう》(千昌夫)に赤とんぼ、《四季津軽》(吉幾三)にはとんぼである。

このように江戸時代から現在に至る「四季」の曲たちを聴くと、昆虫は必ずしも顔を出さず、その中では鳴く虫、蟬、蜻蛉が多いという当たり前の結果になった。しかし虫をキーワードにして聴くと、音楽の姿も変わってくるようだ。



中村洋子 無伴奏チェロ組曲第二巻  
GOLDEN RULE GDRL-1002